

過ぎになった。まだ暑い頃とはいへ、屋敷町の、大分近所が寂静になった門を出て、苔雨君等の三君と此方は樹人君と私とが右左へ別れる。その「さよなら、また明晩」といふ挨拶さへか  
なりの真面目さが籠つてゐたと思ふ。

樹人君と二人になると、歩きながら話すのは、その夜の句の事、苦しかった事、いつも決つてゐた。そして青山御所の裏門の前で別れるのだが、どうかすると、樹人君は電車のなくなつた路を高樹町まで歩かねばならなかつた。堪らないから明日は一晩休養しやうなど、話して別れても、翌る晩になると、また出席しないではゐられない程引付けられてしまつて、休まずに行つて見る。と、樹人君もやつぱり来てゐて、顔を合せるなりにやりと笑つたまゝ、もう句案に呻吟するといふ工合だつた。

今から考へて見ると、あの頃は殆んど俳句といふものがどんなものか解りもしない時分でありながら、勿論今でもさうではあらうが、なほ、相当見るべき句が連夜吟の俳句中に少しはあつた事は、おそらくあの緊張しきつた態度と真剣さが生んだものだと思ふ。あの時の熱心と真剣な意気込だけは、今思ひ出し  
ても涙ぐましいほど尊いものと思ふのは、私一人ではあるまい。

あの時は、先生も豪かつたし、私達も豪かつた。無論私達の間にはお互ひに負けてなるものかといふ若々しい気持もあつたらうが、それにしてもよくあれだけ真剣になれたものだ、息  
け癖のついた今では思ふ。毎晩、行つて見るともう席題が出てゐる。挨拶もそこ／＼に作りだす。出来ない。初めのうちは、  
苦しまぎれに、席上の句集などを拵げて類句を漁つて見たりし

たが、終ひには、そんな事もまだるこくて、たゞもう席題と睨み合ひで轟々句案した。先生は、早くも模倣の不可と個性の伸長を折につけて説いて下さつた。

「この句はいゝ。かういふ句は、やはり私には作れない。……」といふやうな事を度々聞かされたが、その度に、ともすると先生の句の模倣に墜ちかねなかつたし、その模倣すら到底なつてゐなかつた私など、さういはれてみると、やつぱり自分の進むべき句の境地がある事を教へられて窃かに力づけられたものだ。先生には真の「薰陶」の心があり、我々には実に「乞教」の心があつた。師弟——といふ、古いかも知れないが昔ながらの関係を、私は、かなり深い意味あるものと床しく考へるが、この世からはおひ／＼に薄れてゆくさうした間柄につながる心持を、せめて、私はあの連夜吟に身に應へて覺えた事を、  
今だに幸福と思つてゐる。——勿論私は忠実な弟子ではない。寧ろ忘恩に近い弟子であるらしい。其後とて、先生の勘気に触れたる事も度々あつたらうと思ふ。が、今だに、先生の前へ行つて頭を下げる時には、私の心は決して連夜吟当時の懐かしい畏れと親しさに打たれる事は微塵変らない。余程座に慣れないうちは冗談口一つ言へない。——「御無沙汰いたしました。」  
座蒲団を這つて手をつく時。「さよなら」と玄関の格子を辞し去る時——。

この連夜吟も第十夜の終りの夜が来た。その夜は句座の果てに私達の前へは膳部が運ばれた。そしてその膳の一々に酒盃がついてゐた。ホトトギス代理部で小鼓を発売した頃で、酒の飲